チリ大地震津波から3年10カ月、被災地は…

重なる爪痕 歩みに差も

巡回ワークショップ「むすび塾」開催のため、河北新報社国際交流基金が共同で3～12日、南米チリに派遣した訪問団に同行した。東日本大震災のほぼ1年前、2010年2月27日に発生したチリ大地震津波から3年10カ月。住宅再建が進む一方、津波で破壊された建物や船が残る被災地の今を報告する。

赤茶色の復興住宅が100戸が整然と並ぶトメ市ディチャト地区の高台。ブレンダ・ケサダさん（47）は、予定より1年遅れてことし月に入居した。念願の新居だが、排水設備に不具合があり、修理のために一時的に引っ越す予定だと言う。

揺れと津波で20万戸以上の世帯が家を失った。国は復興住宅の整備に力を入れ、土地と家屋の提供のほか、建設費も支給した。

タルカウアノ市トンペス地区の海辺には、復興住宅が点在。漁師たちが「海のそばに住まないと仕事にならない」と主張し、津波で浸水した所有地に1階が柱と梁（はり）だけのピロティ構造の住宅が再建された。津波被害が深刻だった住宅地への居住を制限する日本との違いに驚いた。

急ピッチで復興が進む陸で、各地で津波爪痕を目にした。同市タルカウアノ港では、波打ち際にタグボートが横たわる。震災で気仙沼市に打ち上げられ、解体された漁船を思い出した。

震災モニュメントは整備されたが、津波の威力や備えの大切さを後世に伝える遺構保存の意識は薄く、本格的な動きはこれから。港に面し、津波と火災に耐えた税関事務所を津波博物館として再利用する構想がある。

約1万7000キロ離れた日本とチリ。地震、津波によって傷ついた街、被災者の姿は重なる一方で、復興の歩みは異なる点が多いことを実感した10日間だった。

（報道部・東野滋）

海辺

湾内では、カラフルな漁船が強い日差しを浴びながら、さざ波に揺れていた。海辺にはピロティ構造の復興住宅が点在している＝タルカウアノ市トンペス地区

海の幸

魚屋が集まった仮設商店街の店頭には、三陸の海の幸のような新鮮な魚介類が並んでいた。テーブルの左端の皿に載っているのはホヤの一種＝タルカウアノ市

笑顔

「コンニチハ」。津波の浸水被害を受けた小学校で、子どもたちが出迎えてくれた。犠牲者は出なかったが、悲惨な光景を目にしたため、心のケアが必要な児童もいたという＝タルカウアノ市

住まい

赤茶色の壁、白い屋根が印象的な真新しい復興住宅が立ち並ぶ。整備状況には地域差があり、いまだに仮設住宅暮らしの被災者もいる＝トメ市ディチャト地区

放置

津波により横転したままになっているタグボート。民間所有のため、行政が撤去できず放置されている＝タルカウアノ市

追悼

国が建設し、ことし11月に完成したチリ大地震津波の犠牲者を追悼するモニュメント。高さ約25㍍のコンクリート柱8本は空洞で、内部のプレートには犠牲者の名前が刻まれている＝コンセプシオン市

威力

津波被災から3年10カ月がたつ現在も、破壊された姿をさらし続けている住宅。周辺には津波の威力を物語る「遺構」が多く残る＝トメ市ディチャト地区